
familiar emblem

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a m i l i a r e m b l e m

【Nコード】

N 2 3 0 9 F

【作者名】

L i t a l y

【あらすじ】

誰かのした間違いが僕の形を歪めて、歪んだ僕が今度は誰かを歪める。その誰かがまた他の誰かを。そんな風に連鎖して歪んでいく世界。僕たちは事実としてそんな世界に生きていて、そんな現実には僕たちから夢も希望も簡単に奪う。決定的な敗北が終わりじゃなくて、願えなくなった時が終わりなんだろう。実際の、数値的な可能性じゃなくて、あるいは例え可能性0でも、願える心だけが僕たちを変えていけるんだろう。

この世界で最も僕の事を嫌ってる人間は僕の2つ下の妹だ。

僕の事を多分この世界で一番よく知ってる人物。

彼女こそがこの世界で最も僕の事を嫌悪してる。

僕の家は両親が共働きでいつも帰ってくるのは夜だった。

だから必然的に妹と二人で過ごす時間が多かった。

妹は僕にとっても従順だった。

親のいない間、妹にとって頼るべき人間は僕しかいないわけで、つまるところそうする他なかったんだ。

どこへ行くにも僕の後ろをついてくる妹。

僕はその小さな女の子の気持ちを少しでも考えた事があっただろうか。

応えは否だ。

僕はずっと妹に対して強い嫉妬心を抱いていた。

なぜなら妹が生まれるその瞬間まで僕だけに向けられていた愛情、そのすべてを奪ったのが彼女だったから。

両親は妹に多くの物を買いはじめ、多くの権利を与えた。

お菓子を選ぶ権利を有してるのも妹だったし、ファミコンや漫画本も妹ばかりに買い与えられた。

僕と言えば「お兄ちゃん」になった瞬間に、周りから「お兄ちゃんである事」を押し付けられるようになり、

「お兄ちゃんとして強くあれ」「お兄ちゃんだから我慢しなさい」「お兄ちゃんとして優しくあれ」という要求を重ねられるようになった。

「あなたはお兄ちゃんなんだから〇〇しなさい」

なんてね。

兄弟を持つ親の常套句だ。

それまで僕を中心に周ってた世界が、ある日を境に別のものを中心に周るようになった。

今、あらゆる物事を中心にいるのは僕じゃなくて目の前にいる僕より非力で幼い少女。

こいつは僕より非力で幼いくせして、僕より多くの権利を有している。

僕が間違った事をする親は僕を叩く。

妹が間違った事をして、僕がそれを叱り付けて妹が泣く。すると親はやっぱり僕を叩く。

「お兄ちゃん」の言い分を親は聞かない。

天秤の左右に注がれる愛情は常に斜めに偏りながら、その偏りを正当化するための免罪符でもあるかのように「お兄ちゃんなんだから」と事あるごとに繰り返す。

そういうのが悔しくて仕方なかったんだと思う。

ケツの穴のちっさい人間だと思うけど、でもそういう子供だったんだ。

僕は。

僕のもともとの性自認が女だったから、生まれつき女である妹に嫉妬したのか、それとも「女」である妹に人々が与えるそれらに対して嫉妬する、その強い気持ちが「僕も女の子なら無条件にアレを与えられたのに」というような気持ちを植えつけたのかは分からない。

僕が自我というものをある程度認識する頃には既に、強い劣等感と嫉妬の念を妹に対して抱いていた。

そして自分に与えられた「お兄ちゃん」「男」というポジションが間違っただけのものであるとも考えるようになっていた。

僕は別にオカマでもゲイでもないけど、女の子に対して「男としての恋愛感情」を抱くことが未だにうまくできない。

信頼関係を築くことは出来るけど、男としての態度を要求されることに抵抗がある。

それってというのは、そういう要因も少なからずあるんだと思う。

ただ、そんな妹と僕の勢力図が逆転する瞬間というのがあった。

そう、親のいない、僕と妹の二人だけの時間だ。

こういう時、「最低な兄」が妹をどう扱うのか、想像するのは容易いと思う。

だからあえてここには書かない。

まあ、大体ご想像の通りだ。

僕は最低の兄だった。

親のいない間中、妹を子分のように連れまわし、下僕のようにこき使ったりした。

妹の権力は僕より強い第三者に依存するものだったから、それが無い場面で妹はほとんど無力になる。

妹もその事を自覚している。

だから僕には逆らえない。

逆らえばどういう目に遭うのかを知っている。

そしてその虐待を止めてくれる「大人」はいない。

逆らうわけにはいけないのだ。

高校に入って、妹は外の世界を知ることになった。

内気で無口だった妹にもたくさんの友達が出来て、僕に付き従う理由がなくなった。

妹は僕をあからさまに嫌悪するようになった。

僕のするような考え方、僕の好むようなセンス、僕のような人間が掲げる正しさや情熱、僕のような人間全てを否定するようになった。

「何言ってるの！？馬鹿じゃないの！？まじうっざいんだけど！！」

急に「下僕」に手のひらを返された僕は何が起きてるのか分からなくて、すごい剣幕で僕を罵る妹の顔をただぼかんと眺めてた。

妹はオリコンチャートにランクインするようなインスタントな音楽を聴くようになった。

妹は少女マンガに脇役で出てきそうな凡庸な連中と付き合うようになった。

妹はマニュアルどおりの大衆的な考え方をするようになった。

妹は原宿に溢れ返ってる子供たちみたいなミーハーな格好をするようになった。

まるで僕という人間の内に見つけた価値観の全てを黒のボールペンで塗りつぶすかのように。

それまで自分を子分のように扱ってきた兄を、

少女マンガに出てくるようなさわやかで優しくて理想的な兄貴像の欠片もない陰険で傲慢で自己中な兄を、

自分の事を平気で子分扱いするくせに都合のいいときだけ場当たり的にみせる兄の正義感やら情熱やらを、

その全てを否定するかのように、僕とは真逆にあるものを妹は望むようになった。

僕は文字通りの意味で、妹にコンプレックスを抱いている。

今でも実家に帰った時なんかには顔を合わせると、気まづくてまともに顔が見れない。

シスターコンプレックス。

妹に対する難解な感情。

罪悪感？

少し違う。

覚えてるんだ。

冬の寒い日で。

ポケットに麦チョコが二つ。

陽はもうとっくに落ちてる。

ゲームセンターに行った帰り道。

話をしたんだ。

理想の家族とか、理想の家とか、理想の世界とか。

もちろん、妹の気持ちなんてこれっぽっちも考えないクソガキの戯言につき合わさせただけ。

川沿いの道で。

もちろん、自分の気持ちなんてこれっぽっちも考えない矮小な兄貴の戯言に付き合っただけ。

落ち葉がたくさん、たくさん落ちてて。

街灯に照らされたその薄暗い道はどこまでも続いてる気がして、急に不安になった。

まるで世界に二人きりで、どこまで歩いたってどこにもたどりつけない気がして。

理想の家族にも、理想の家にも、理想の世界にも。

陰湿で内向的な僕には友達なんてほとんどいなかったから、そんな日のことばかりよく覚えてる。

白い息、穴が開いたグレーの手袋、枯葉、時々横を通る車のヘッドライト、映し出されて揺れる二つの影。

食べ損ねた麦チョコはポケットの中でもう溶けて潰れてしまってる。

ほんのささやかな、でも形を歪めるには十分過ぎた熱量。

今更その熱量を取り去って再凝固させたとしても、もうもどおりのかたちには戻らない。

絶対。

僕の斜め後ろをどこまでもついてくる小さな女の子。

どれだけそれに救われてたのか。

考えようともしない最低最悪のクソツタレだったけど。

感謝してるんだよ、本当に。

、

小さい頃僕が感じた事を、なるべく歪曲しないでそのまま書きたかったから、まるで親が悪者のような書き方になっちゃったけれど、僕は親が特別悪いとも思っていない。

子供を持つ親になったからって、いきなり完璧超人になるじゃない。

今の僕よりほんの少し年を重ねただけの若い男女にとって「子供を持つ」と言うことがどういうことなのか。

初めての体験で、きっと分からない事だらけだ。

それでもそんなのお構い無しに「厄介ごと」は次から次へと沸いて起こる。

「正しいやり方」なんて存在しない。

「正しい子育て法」みたいな本は沢山あるけど、どれも嘘っぱちだ。そんな紙切れの中に「正しい子育て」など存在しない。

100万人子供がいれば、100万通りの正しさがあるのだ。

ある子供にとっての「正しい育て方」は、他の子供にとって「間違った育て方」にもなる。

子供を正しく育てたいのなら、本よりもまずその子供自身をよく見て、捉えて、そうして答えを探すべきなんだ。

答えなど、宇宙に一人しかないその子の瞳の中にしかあるはずない。

絶え間ない重圧の中で、手探りで答えを模索するしかないのだ。

様々な困難をすべて正しく解きほぐして「二人の子供」を平等に扱えるほどの「素晴らしく出来た人間」を自分の親にだけ要求できるほど、僕はもう子供じゃない。

今の僕にそれを要求されたとしたら、僕は絶対に「正しい親」にはなれないと断言出来るから。

僕が正しい「お兄ちゃん」でいらなかったように、両親もまた「正しい親」になんてなれなかった。

間違いを沢山犯す。

誰が、じゃなくて、みんなが、犯す。

その間違いによって様々なものが歪められた。
そういう歪みは時として不幸を招く。

昨今新聞に載るような「子供による両親殺害」や「親による子供殺害」はきつと「僕ら家族」と無縁の物ではない。
僕ら家族にだって、起こりえた話なんだ。

誰もが過ちを犯しながら生きてる。
過ちを犯し続けながら、生き続けてる。

「悪者」を仕立て上げ、それを打ちのめしたところで悲劇は終わらない。

「間違いをした悪者」を打ちのめす僕らもまた、間違いを犯してるんだから。

大事なのは、責任を持つ事だ。

自分の生き方に責任を持つこと。

自分のした過ちを知ること。

償うことなんて出来るはずも無い。

一生その過ちを背負っていくしかない。

親は僕らにした過ちを、僕は妹にした過ちを。

それが歪めてしまったものを、ただ両の目で見続けて、苦しみ続けるしかない。

ほんの少しの間違いを重ねること、僕ら一家皆が歪んだ。

きつとその歪みが正しく矯正されることは二度とない。

小さい頃に歪んだ僕の性自認はもう二度と戻らないし、妹は「僕の指し示したもの」を多分死ぬまで受け入れられない。

人格を構成する段階で刻まれたそれらというのは、多分死ぬまで矯正できない。

今更無理やり矯正したところでそれが正しいとも言い切れない。
どこかで道を間違えたのだとしても、その間違った道の上で、僕も
妹も、一瞬一瞬を精一杯生きてきた。
そうやって今がある。

溶けたチョコレート。

もしいくらかでも救いがあるとするならば、それは「過ちに気付けること」だ。

人は間違いをする。

でもそれに気付く事が出来る。

僕の両親は僕が二十歳を過ぎて、初めて僕に謝ってくれた。

自分達のした過ちを。

自分達が何を歪めてしまったのかを、直視して、顔を背けず、僕に謝ってくれた。

僕もまた自分の過ちに気付く事が出来た。

それに気付いたからといって、歪められてしまったものはもう戻らない。

でも、これから変わっていくことは出来る。

歪な形で凝固したチョコレートを、みんなの体温で溶かして、今度は優しく。

そして新しい形にする事が出来る。

たとえそれが完璧な形じゃなくても、少しずつでもそれぞれの望む

形に近づけたら、と思う。

この間実家に帰った時、妹に向かって、真面目に頭を下げてみた。

「しょうがないよ。ちっちゃい頃なんてみんなそんなもんだよ」と言って、妹は許してくれた。

とはいえ、やっぱりギクシャクした感じは抜けないし、ちょっとした事で口論になる場面も多い。

道端でばったり顔を合わせても、気づかなかったフリをしてしまったりする。

良くて片手をあげる程度。

笑顔で会話なんてまだまだ。

それでも。

明日はもう少しだけ。

だって、家族だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2309f/>

familiar emblem

2010年12月28日11時11分発行